



こんにちは、まちかど図書館ぼたんです！桜の季節も終わり、過ごしやすいたたかな日が続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか。大学では、新入生の華やかな様子が感じられます。

進級にあたり、今年度は築山ゼミ7期生8名を加えた計15名でぼたんを運営していきます。利用者様、オーナー様、そして地域の皆様とのつながりを大切にしながら、より多くの方に利用していただけるよう、新たなことにも挑戦していきたいと考えています。今年度もよろしくおねがいいたします。



2026年4月9日 第一回ゼミ 大学生門にて

Topic 01 第16回イベント、開催しました！

2026年3月21日(土)に、第16回イベントを開催いたしました。今回は、長野県立大学で8年間初代学長として務められた金田一真澄先生に、「祖父・金田一京助、父・金田一春彦を語る」というテーマでご講演をいただきました。金田一先生には、今年1月に、まちかど図書館ぼたんのオーナーになっていただきました。

当日は「ぼたん」の利用者様、チラシをご覧になったたくさんの方々にご参加いただきました。



7期生の赤羽さん、鈴木さん、田中さん、藤澤さんが作成した「金田一京助・金田一春彦資料集」(42頁)が全員に配布されました。また、資料集に掲載された、京助、春彦の著作物、京助の処女作の翻訳本、京助直筆の色紙や春彦の署名本なども展示されました。

【金田一京助について】

今回の講演では、日本語学者として知られる金田一京助の人生と研究について、さまざまなお話をうかがいました。

京助は東京帝国大学で言語学を学び、恩師である上田万年のもとで研究を始めます。その際に与えられたテーマが、当時あまり注目されていなかったアイヌ語でした。当時の社会では、アイヌの人々や文化に対する理解が十分ではなく、研究すること自体が難しい状況にあったそうです。それでも京介は、そのテーマを受け入れ、静かに研究の道を歩み始めました。彼の研究は、机の上だけではなく、実際に現地に足を運ぶフィールドワークが中心でした。北海道や樺太(サハリン)に渡り、現地の人々と生活をともにしながら言葉を記録していきます。特に印象的だったのは、言葉がまったく通じない中で、子どもたちとのやりとりをきっかけに少しずつ言葉を理解していったエピソードです。



絵を描きながら「目」や「鼻」などを指し示し、子どもたちの反応から言葉を覚えていく——その体験は、有名な随筆「心の小径」に書き残されています。講演の後半に、金田一先生が、朗読してくださいました。その一節をご紹介します。

「ただ、私は、「なに？」という一語がほしくなった。それさえわかれば、こころのままに、物をさして、その名を聞くことができるのである。そこで、ふと思いついて、もう一枚紙をめくって、今度はめちゃくちゃな線をぐるぐる、ぐるぐる引きまわした。年かさの子が首をかしげた。そうして、「ヘマタ！」と叫んだ。すると、他の子供もみんな変な顔をして、口々に、「ヘマタ？」「ヘマタ？」「ヘマタ？」。うん、北海道で「なに」ということを「ヘマンダ」と言う。これだ、と思ったから、まず試してみよう。身のまわりを見まわして、足元の小石を拾って、私からあべこべに「ヘマタ？」と叫んでやった。驚くべし、むらがる子供らが私の手元へくるくるした目を向けて、口々に「スマ！」「スマ！」と叫ぶではないか。北海道で石のことを「シュマ」という。してみると、「スマ」は石のことで、そうして、「ヘマタ」はやっぱり「なに？」ということに違いなさそうだ。」

京助のアイヌ語研究はすぐに評価されるものではなく、生活は長いあいだ厳しいものでした。大学で教えていても学生が集まらないことがあり、経済的にも苦しい時期が続いたそうです。それでも研究を続けることができた背景には、恩師の上田万年や、民俗学者の柳田国男といった人々の支えがありました。

また、講演の中では、京助が非常にまじめで、物事に対して真剣に向き合う人だったというお話もありました。例えば将棋を指すときでも、相手が子ども（真澄先生が小さなころ）であっても手を抜かず、じっくり考えて対局していたそうです。そのような姿勢からも、どんなことにも誠実に向き合う人柄が伝わってきました。

学者としては、1930年代に、「アイヌ叙事詩ユーカラの研究」で、帝国学士院（恩賜）賞を受賞するなど、評価されていました。戦後、1950年代に、随筆集「心の小径」などが刊行され、教科書にも掲載されるようになり、70歳を過ぎてから、京助の著作は広く読まれるようになったのです。専門書とは違う、随筆における、京助のやさしい語りは、戦後の日本社会で求められ、京助は国民的文化人となったのです。そして、72歳には文化勲章を受章します。文化勲章を受章した時期に一般読者にも広く読まれるようになったのです。「昭和20年代半ばからの三十数年、金田一を知らない日本人はいなかった。」と言われる所以です。

1899（明治32）年4月1日に、北海道旧土人保護法という、アイヌの人々を「旧土人」として位置づけ、農地付与や日本語教育などを名目に同化政策と土地収奪を進めた法律が施行され、驚くことですが、1997（平成9）年に、アイヌ文化振興法が施行されるまで廃止されることなく、現行法として存続していました。1899年4月1日、京助16歳です。アイヌから土地を収奪し、アイヌ文化を抑圧し、差別する制度がつくられた時代に、京助は生きていました。京助は、アイヌ語は失われていくものとして、記録するべき貴重な文化として認識していたと思われます。当時の知識人は、京助も柳田国男も、それを保護すべき対象ととらえて、日本国家の植民地主義的な同化政策を肯定しながら、周辺文化を収集するという側面を持っていたと思われます。そのようななかで、知里幸恵らアイヌ話者と直接繋がり、アイヌ語を今に伝えた京助の仕事は、貴重な仕事だと思われます。

【金田一春彦について】

春彦は、父・京助を「永遠のライバル」と考えていたそうです。偉大な父を超えるべき存在として強く意識し、その思いが人生や研究の方向にも大きく影響していました。

京助は盛岡出身で、東京に出てから懸命に東京方言を学んだといいます。方言を話すことが不利に見られる時代でもあり、言語学者として標準的な話し方を身につけようと努力したのでしょう。東京出身の妻を娶（めと）り、その結果、どこか柔らかな女性的ともいわれる話し方になったという逸話も紹介されました。



一方、東京で育った春彦は、自然に標準語を身につけていました。そのため、自分には父とは異なる強みがあると感じていたようです。父が不得意とするアクセントや方言の分野に注目し、自らの専門として深く研究しました。真澄先生は、京助を「言語学者」、春彦を「国語学者」と呼ぶべき存在であったと語られました。

春彦はまた、学問の世界だけに閉じこもる人ではありませんでした。NHKのアナウンサーたちに日本語を教える仕事にも携わり、正しい発音や美しい表現を伝える役割を担いました。さらに、もともと話し上手で、人前で語ることに喜びを感じる性格でもあったそうです。難しい内容でもわかりやすく、しかも楽しく語れる才能は、学者としてだけでなく教育者としても大きな魅力でした。

春彦が44歳のときに出版した岩波新書『日本語』は、その代表的な成果です。この本は非常に読みやすく、日本語の不思議さや面白さを平易な言葉で解説し、大ベストセラーとなりました。真澄先生のお話では、この本が生まれた背景には、外国人に日本語を教えた経験があったそうです。中国人の学習者から、「なぜ『知っている』の反対は『知っていない』ではなく『知らない』なのか」「『読んでいる』は進行中の意味だが、『結婚している』も同じ進行形なのか」といった素朴な質問を受けました。日本人なら当たり前に使っている表現でも、改めて問われると説明が難しいものです。春彦は、そうした問いを通して、日本語を外側から見直す視点を得ました。そして、その気づきを多くの人に伝える形で本にまとめたのです。

その後、春彦はテレビなどのメディアにも積極的に出演しました。親しみやすい笑顔と巧みな語り口で人気を集め、言葉の専門家として多くの人に親しまれました。真澄先生によれば、人と語り合い、笑い合いながら過ごすことこそ、春彦らしい生き方だったそうです。

【春彦との思いがけない出会い】

真澄先生は、2014年に慶應義塾大学を退職された後、長野県立大学の設立に関わることになりました。当初は大学づくりに携わる一員として考えており、自らが学長になるとは思っていなかったそうです。その後、長野にあった前身校の長野県短期大学を訪問した際、学内を案内される中で、思いがけない資料と出会いました。

それは、かつて春彦が同校で講演した際の記録冊子でした。題名は『日本語の心』。1997年、春彦が長野県短期大学で講演を行っていたことを知り、真澄先生は大変驚かれたそうです。自分がこれから関わろうとしている場所に、17年も前に父が訪れ、同じ土地で日本語について語っていた——その事実には、不思議な縁を感じたと語られました。

講演録には、春彦らしい語り口がそのまま残っていたそうです。春彦は、日本語の特色を説明する際、日本人の「奥ゆかしさ」に注目していました。たとえば、家庭で「ご飯ができました」「お風呂が沸きました」と言う表現があります。本来であれば、自分が作った、ご飯を炊いた、お風呂を沸かした、ということもできます。しかし、日本語では、あえて行為の主体を前面に出さず、自然にそうだったかのように表現するのです。

春彦は、こうした言い回しの中には、日本人特有の控えめな美意識や、相手への気遣いが表れていると考えていたようです。「私がやりました」と強く主張するのではなく、「できました」「沸きました」と柔らかく伝えるところに、日本語の文化的な特徴があるというのです。難しい専門用語ではなく、日常の何気ない会話から日本語の本質を語るところに、春彦ならではの魅力を感じました。

真澄先生によれば、春彦はこうした話を家庭でもよくしていたそうです。講演前には自宅で何度も語り、家族にとっては“聞き慣れた話”になることもあったと、ユーモアを交えて紹介されました。それだけ春彦は、人に伝えることを大切にし、言葉について語ることを楽しんでいたのでしょう。

その後、真澄先生は長野県立大学の初代学長に就任されました。ご自身の専門はロシア語・言語学の分野であり、経営系学部を柱とする新設大学の学長になるとは思っていなかったそうです。しかし、その背景には「金田一」という名前が持つ信頼や、春彦・京助が築いた文化的功績もあったのではないかと振り返られました。

講演の最後に真澄先生は、学長として学生や教職員に恵まれ、教育に携われた8年間は大きな幸せだったと語られました。そして、そのきっかけの一つに父・春彦の存在があったことへ、深い感謝の思いを述べられました。

【真澄先生の学長としてのお姿】

参加者からの質問に回答していただく中で、真澄先生が「学生と直接話すことが私にとってはエネルギーになる。」ということが語られました。学長という立場でありながら講義を受け持ち、学生との交流を大切にされていた真澄先生の教育に対する熱意が感じられました。

築山ゼミの学生は、「金田一家について書かれた資料から、真澄先生がユーモアを楽しまれる一面があることを知り、親近感を感じた。」という感想を述べました。学園祭で教員と一緒にコントをするなど、学生だけでなく、教授陣からも親しまれている様子うかがえました。



【講演会の感想のご紹介】

講演会に参加いただいた皆様からたくさんのご感想を頂きました。そのなかで、いくつかをご紹介します。

- ・有名人であるという思いしかなかった金田一京助先生、春彦先生の人となりを知れて、楽しく聞かせていただきました。率直に講演された学長に感謝いたします（U氏）。
- ・大変良かったです。企画いただきありがとうございました。初めて知り驚いたことが二つありました。一つは、金田一家は岩手の産であること。宮沢賢治・石川啄木・大谷翔平・HERALBONY、岩手が生み出す、知とアートに驚きます。岩手のDNAは、違うのでしょうか？私の身近では彫刻家の舟越保武。子どもたちは全員アーティスト。私は保武の長女、絵本編集者の末盛千枝子さんと交流があります。もうひとつは、金田一家といえば辞書・国語くらいしか知識がなかった中で、京助先生はアイヌ語研究が一番の専門であったこと。それにあって東大に入学した時の教授が言語調査を学生にわりふった話で、1900年代初めに日本はアイヌ語や琉球語を「日本の言語」と認知？していたこと。つまり当時すでに日本は単一民族国家としての認識ではなかったということ？？？文字を持たないアイヌ語を、録音機能もなかった時代にどのような方法で記録していったのでしょうか？私の専門では「手話」という言語がからんできますが、京助先生が生きておられたら、この言語をどうとらえたかなど。真澄先生はスマートな学長さんで素敵な方でした。学生にどんな言語学をご講義されていたのかお聴きしてみたかったです。退職後も長野市民になってくださるといいのですが・・・ご講演ありがとうございました（K氏）。
- ・祖父京助と父春彦の対比が興味深かったです。初めて伺った後町キャンパスで金田一三代の軌跡に触れる貴重な機会になりました（N氏）。
- ・山梨に住んでいたときに、県立図書館において秀穂先生の講座に何度も参加させていただいたので、今回の真澄学長によるお祖父様、お父様についてのお話も非常に興味深く拝聴いたしました。このような貴重な機会を作ってください、ありがとうございました（M氏）。
- ・「中学国語」に掲載されたお話（いいお話ですね。ファンレターが多数届いたのは理解できます）は存じませんでしたので、先生が朗読してくださったのを情景を想像しながら拝聴しました。以前、ウィクリフという聖書翻訳に携わる団体からネパールに派遣された宣教師のお話を聞いたこと



があります。具体的な物をさし示して、これを何と言うかと訊いて答えてもらって書き留めていくという大変地道な作業を繰り返して行くと伺いました。樺太での京助先生の体験と似ていますね。お互いのことばを知らなくても、人と人は通じ合うことができることを教えられました。参加して良かったです（S氏）。

・前回の「最終講義」はもちろん、大変充実した内容でしたが、小生にはなかなか難しいものでした。それに比べてはいけませんが、今回の「講演会」は、興味深く、身近で、学長の本音のお話が聞け、ほんとうに心に沁みる内容でした。金田一学長様のことは、ずっと忘れることはありません。今回、素晴らしい企画をしていただき、有難うございました（T氏）。

・貴重な機会を作って頂き、有難うございました。金田一京助さんのお名前は何度も目にしておりましたが、近い方からの視線でのお話を楽しく聴かせて頂きました。自分でも著作など調べてみようと思えました。ひとつ興味の入り口を作っていただきました。有難うございました（M氏）。

・「公開講座」として規模の大きな講演会にしてもよかったと思うほど、貴重で楽しい講演でした。春彦先生はテレビで拝見したことがあります。辞書や国語便覧で「歴史的人物」としての認識だった京助先生、春彦先生（私は学生時代国文科でした）が、人間味のある「人」として立ちのぼってくるお話、わくわくしました。また、学長が京助先生春彦先生に「再会」するお話は、胸にじいんとくるものがありました。素敵な企画、ありがとうございました（O氏）。

・親子三代にわたる歴史と研究実績を金田一先生に語っていただくという趣向がとても楽しみで参加させていただきました。私自身は長野県立大学の同窓会六鈴会の会員です。同窓会事務局に勤務していた時期が短大から四年制大学への移行期でしたので、上條先生、金田一先生、築山先生ほか多くの教職員の皆様に、大変お世話になりました。上條学長が新大学への期待を厚く語られたお話を金田一先生からお聞きし、新大学構想に一喜一憂した当時のことを思い返しました。いろんなことがありましたね。複雑に縁が絡み合っていて感慨深いです。講演の最後に金田一先生が、祖父・父には縁のなかった「学長」になったことをご自分の功績に挙げられていたのがとても印象的でした。今回の講演会にもご縁をいただき聴講できましたことに感謝いたします（Y氏）。

・国語辞典の編集者の印象が強い金田一家です！とても内容が濃い、素晴らしい講演を学長ご本人から聴くことが出来、とても良かったです（M氏）。



・パワーポイントの資料が不具合になったことで、先生のお話をゆっくり聴くことができました。県立大はお散歩コースであり、県立短期大学附属幼稚園で子どもがお世話になりとご縁の深い所です。貴重なお話を聴かせていただき、ありがとうございました（A氏）。

・金田一真澄先生のお人柄に触れることができました。ご家族の秘話を楽しくお話し頂き、楽しい時間となりました…有難うございました。実は教える事が1番好きと、幸せな気分になる…とおっしゃられてましたが、私は学生時代ではなく今になって学ぶ楽しさを覚え、お話をお聞きするのが今は楽しくて仕方ない…勝手に親しみを覚えました。最後に長野、北信濃が日本の原風景を残している、これからも残して欲しいとおっしゃっていただき嬉しく思いました。築山先生、お忙しい中素晴らしい企画をしていただきまして御礼申し上げます。お疲れ様でした…有難うございました（H氏）。

・子供の頃、学校で学んだ金田一京助・晴彦両氏、弟の秀穂さんを身近な家族の視点からお話を伺えたことは、とても貴重な体験でした。また、早稲田で理工学を専攻されたにもかかわらず、ロシア語学者になられた経緯についても伺え、調布市時代の自分を振り返る（電通大応用電子工学専攻→障害者地域福祉事業）参考になりました。そのうえ、私の卒業した茨城県立土浦第一高等学校の大先輩で、『定本野鳥記』を書かれた中西悟堂さんが創立した、日本野鳥の会代表を長年された柳生博さんとの八ヶ岳山麓でのエピソードは、楽しく聞かせて頂きました。有難うございました（O氏）。

・今や亡き父から、金田一京助・春彦親子は「日本語の神様のような存在」であると聞かされて育ちました。辞書の編纂をなさっていたことが大きかったのだと思います。実際は金田一京助先生は「言語学者」、春彦先生は「国語学者」と違いがあったこと、京介先生は人生の前半はフィールドワークをなさっていたこともあり、生活が厳しかったこと等を初めて知ることができました。興味深く、貴重なお話をお聞かせいただき、有難うございました（M氏）。

・金田一先生の人となりやご家族との関係など、新たな一面を知ることができた貴重な機会でした。とてもフランクにご自身やお父様、御祖父様のことをお話いただき、金田一先生を身近に感じることができました（H氏）。

・貴重な機会をいただき、ありがとうございました。学ぶこと、考え抜くことの楽しさを改めて感じさせていただきました。合わせて、伝えること、対話することの大切さを学ばせていただきました（I氏）。

Topic 02 5月のイベントについて

第18回イベントを開催いたします。

今回は、2月に実施した金沢でのゼミ合宿で得られた知見についてご報告いたします。

皆様のご参加をお待ちしています！

日時：5月31日（日） 13:00～15:00

場所：まちかど図書館ぼたん

スピーカー：築山ゼミ6・7期生

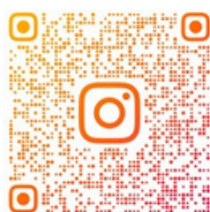
テーマ：みんとしよ「コトノハ」・「おんせん図書館みかん」について

Topic 03 開館時間について

ホームページ



Instagram



開館時間は10時から18時までですが、ゼミ生と教員が店番をしている関係で、その時間内で、可能な時間に開館しております。詳細はホームページまたはInstagramで確認をお願いいたします。

URL:<https://machinakabotan.com/www.machinakabotan.com/>

Topic 04 アクセス



〒380-0826
長野市南長野北石堂町1185-6
JR長野駅から徒歩7分、
※専用駐車場はございませんので、車でお越しの際はお近くのコインパーキングへのご駐車をお願いいたします。



2026年4月30日発行

編集：長野県立大学 グローバルマネジメント学部 築山ゼミナール

住所：〒380-8525 長野市三輪8-49-7 B309研究室

Tel：026-217-2241（代表） fax：026-235-0026

E-mail：tsukiyama.hideo@u-nagano.ac.jp

主催：長野市中心市街地活性化協議会（事務局：まちづくり長野）